

論文紹介

題 名:

「大学の文化・方針・プロセスが“大学の意思決定への学生参画”に与える影響」

The impact of institutional culture, policy and process on student engagement in university decision-making(2018)

著 者: Philip Carey,

Associate Dean Education for the Faculty of Education,
Health & Community in Liverpool John Moores University(所属は2018年時点).

出 典: Perspectives: Policy and Practice in Higher Education
Volume 22, 2018 – Issue 1

紹 介: 佐藤琢磨 法政大学 研究開発センター

概 観

- 1 欧州では、学生参画の概念が広く受け入れられている
- 2 一方、「学生参画」に関する“概念“は不明確である
- 3 理論的根拠とエビデンスベースの確立が求められている
- 4 異なるタイプの「学生参画」を促す学生参画モデルの提示
- 5 学生の参画を形成するのは「大学」のコミットの仕方である

導 入 ～問い～

- 「学生の参画」が受け入れられているように“見える“のは共有されている「概念」が不明確なためである
→あらゆる人にあらゆる意味をなしうる考え方に
- 様々なタイプの学生参加を促進するための「学生参画モデル」を提案することで一石を投じる
(学生活動から組織活動へフォーカス)

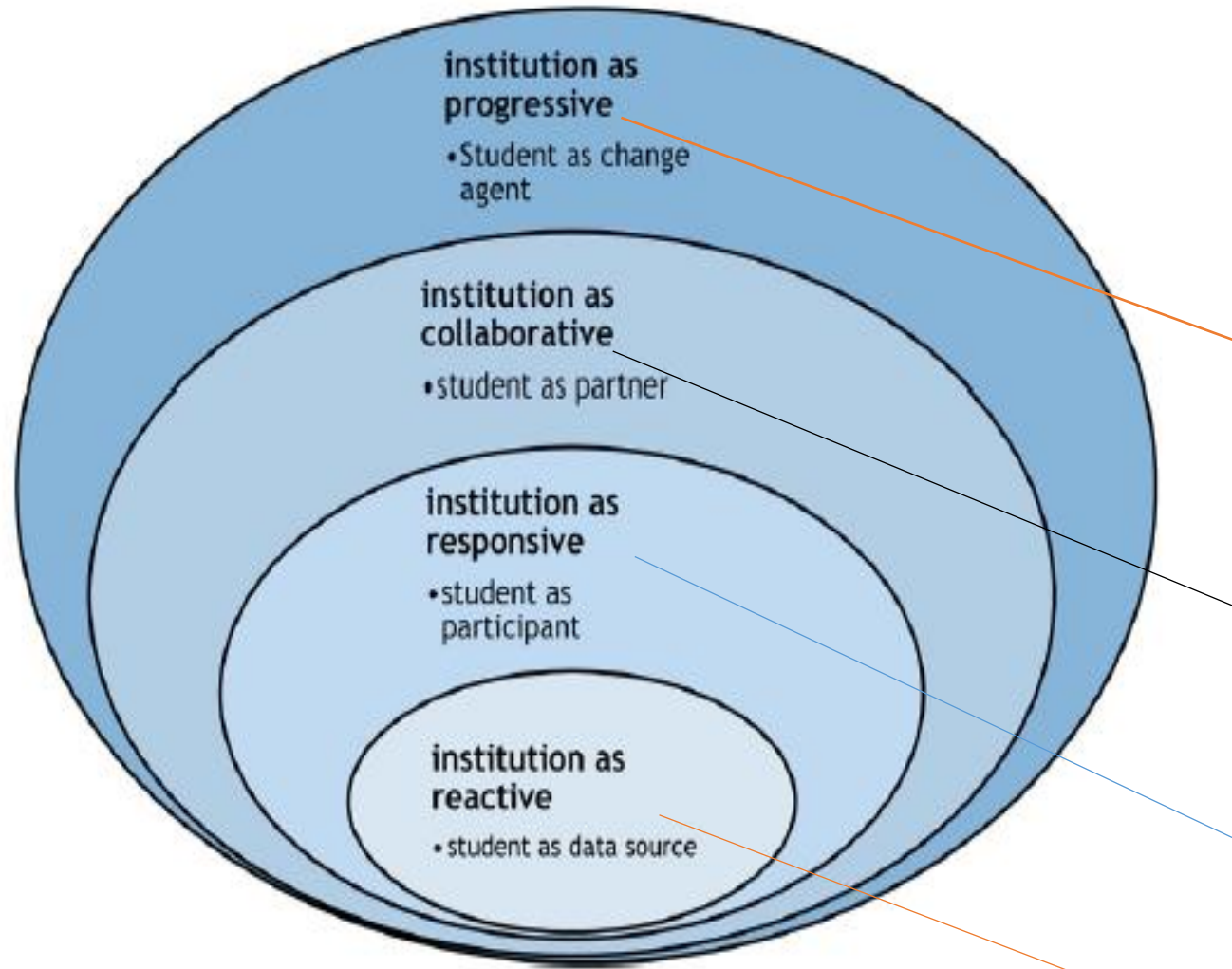
本 論 （１） ～学生参画に対する権力のインパクト～

- 学習・アイデンティティ・ガバナンスという3つのテーマのうち
→ 本稿は“**ガバナンス**に焦点”
- 質保向上のため“学生の参加拡大”を重視する欧州の流れ
- 英国質保証機構(QAA)は、「すべての学生を、個人としても
集団としても、**教育経験の保証と向上のパートナー**として参
加させるための措置」を大学に要求

本 論 （２） ～学生参加の階層～

- 学生参画の4つの役割 Kay, Dunne, and Hutchinson (2010)
評価者 < 参加者 < パートナー < 変革者（参加→参画）
- 学生の参画範囲は、大学の「期待や要求」により異なる
- そのため大学のニーズに対応した学生の参画形態を示した
「入れ子階層形式」を提示
 - 学生と大学の役割を結びつけ、大学がいかに行動し、学生にどんな行動を奨励するか説明するもの
 - 学生参画を組織的に推進することで、異なるタイプの学生を区別

本 論 (3) ～入れ子階層形式～



大学	学生	機能
進歩的	変革者	学生が意思決定で優位
協力的	パートナー	積極的主体/変革根拠
レスポンス	参加者	コンサル・対話
反応的	評価者	データソース

Figure 1. Nested hierarchy of student engagement interactions.

本 論 （４）～ 入れ子階層形式 ～

- 区別された異なるタイプの「学生参画」が共存できる可能性
- 例えば、“大学のデータ“は、参加型の学生参画の基盤になる可能性。（reactive → レスポンシブ）
- 同様に、コラボレイティブ参画の成果→“反応的”段階の対応へフィードバックされ、より広範な学生全体の評価の可能性（協力的 → reactive）

本 論 （５） ～市民参加概念とリンクモデルを提案①～

- 「学習理論」ではなく「市民参加」という理論的レンズで学生参画を理解する研究が増えている（コラボレーション、アドボカシー）
- これらの研究は「（市民と）権力」という問題に長年取り組んできたため、学生の「参画プロセス」の検討に有用
- アーンシュタイン（1969）の「参加の梯子」に、「学生参画」を関連づけることで、市民参加概念と学生参画の結びつけを提示
→ 「参加の梯子」×「入れ子階層形式」

本 論 (6) ～市民参加概念とリンクモデルを提案②～

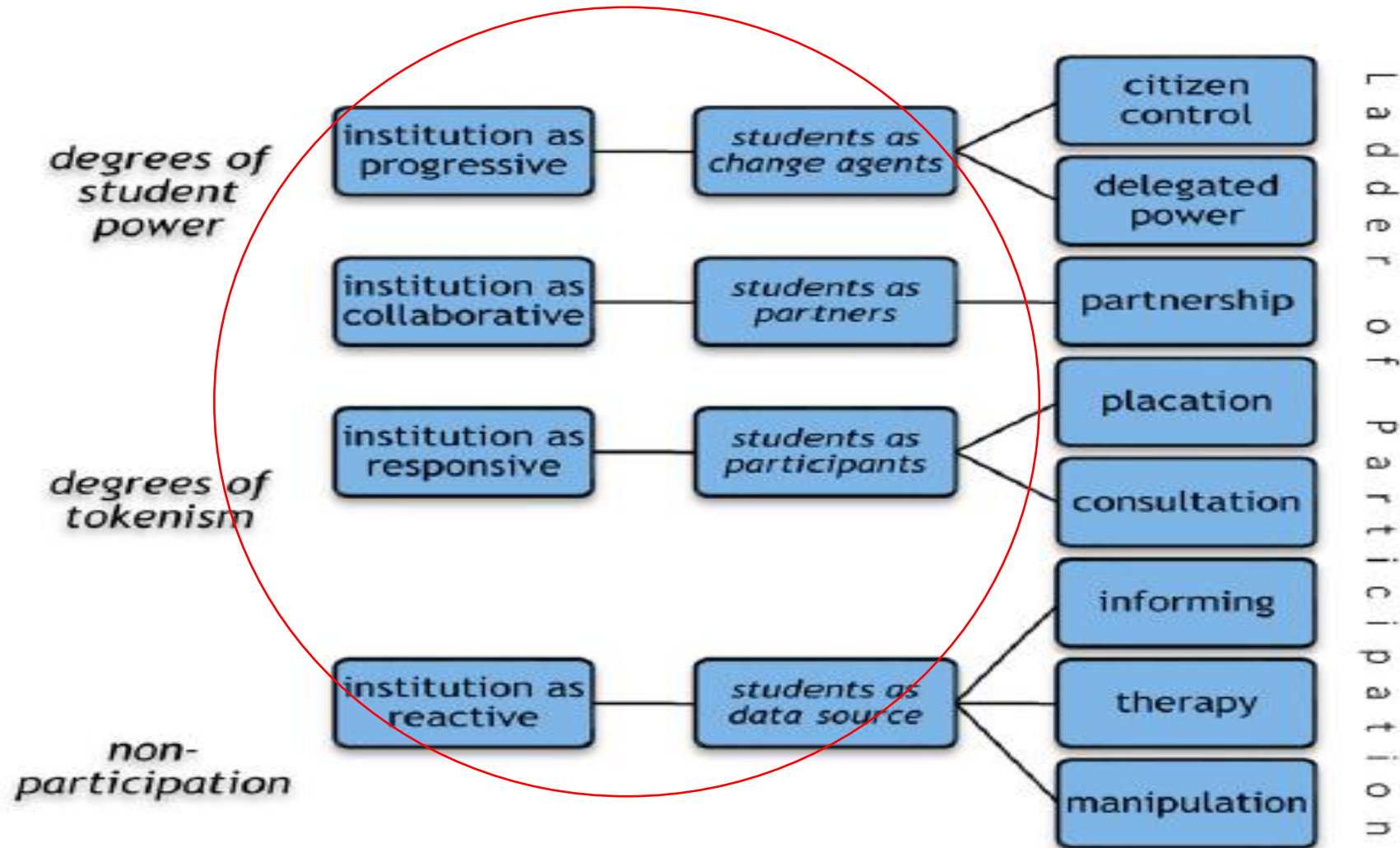


Figure 2. The nested hierarchy of student engagement interactions mapped to Arnstein's Ladder of Participation.

本 論 （ 7 ） ～委員会から授業へ①～

- 市民参加における「権力」は公式ルールで定義される
→ 学生参加も同様
- 大学は、学生がより高いレベルで参加することを、**どこでどのように期待するか**を検討する必要がある
- 市民参加では、「委員会」は儀式化された空間→参画の足枷

本 論 （８） ～委員会から授業へ②～

- 委員会には「対話がない」「専門用語」など、学生の混乱や、参加プロセスに時間がかかるなど、参画に熱心な学生も苦勞
- 融通の利かない委員会は、パワーバランス不均衡の象徴
- これを変えることでコラボレーション（市民参画の概念）が促進
- 「委員会」ではなく、「授業」における学生参画の可能性

日本の高等教育との相違点

- 1 「ガバナンス」に学生を関与させている
→ 学生のとらえ方・立ち位置の違い
- 2 「教育の質保証」に**欠かせない**存在という共通認識
- 3 「学生主体の学び」という方針の具現化の一つ

日本と異なるユニーク、あるいは特筆すべき視点

- 1 欧州では、「学生参画」が法令化されている
「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン」(ESG 2005)
- 2 学生参画が質保証と質の向上に向け推奨、実施されている

日本の教育・研究・大学経営にもたらす新たな視点

◆他国が抱える類似のテーマへの取り組みを知ることによって、発想もしていなかった「選択肢」を得られる点。

- 1 質保証向上にむけた学生参画の検討(現実的)
- 2 「学生主体の学び」(成長)に向けた学生参画の取組(検討)

おわりに

ご清聴ありがとうございました。